十一カ月目の英炭鉱スト

家族に支えられた男たち

ルポ ――『カナデァン』紙から――

十一カ月目にはいったイギリス炭鉱労働者の長期スト。〝非能率坑〟の閉鎖による二万人の首切りに反対して昨年三月にはじまったこのストは「石炭公社と炭鉱労組の話し合いによる解決がなければ、まだ数カ月、あるいは数年続くことになるだろう」(ノーマン・ウィリス英労働組合会議書記長)という厳しい見通しです。英紙『週刊ガーディアン』(一月六日付け)のルポからヨークシャー炭田地帯の模様を紹介します。

〝非能率〟の正体

ヨークシャーのヒックルトン炭坑は狙われている〝非能率坑〟の一つです。鉱員約千四百人で年産百万トン足らずでは、同地方の超優良坑であるセルビー炭坑(二千二百人、年産一千万トン)に比べれば能率の差は歴然。しかし同坑は、この地方で最も深く地底は熱く、労働者は塩をなめながら四つんばいで炭を掘ってきました。

「政府と石炭公社は八年前から閉鎖を狙って機械化投資をサボってきた」「その一方で、優良坑を民間企業に売り渡そうとしている」「同じ国有炭鉱だから、能率坑が非能率坑を助けるべきだ」と労働者たちは主張します。

家族ぐるみで

「三十六歳になるまで警察の世話になったことはないのに、今や〝内部の敵〟で犯罪人扱いだ。しかし、子供や女房は、そうじゃないことをよく知ってるよ」という労働者。妻たちは組合の共同のたき出しで鉱員たちの朝・夕食をまかない、子供たちはボタ山を掘って暖房用の石炭を探してくる毎日。家族の連帯に支えられて男たちはたたかいます。ヨークシャー炭田ドンカスター地方の三つの炭坑では、ストから離脱して入坑する労働者は多くて六人、少なくて二人。管理職まで「鉱員たちの炭鉱労組支部への忠誠心」に感嘆しています。

おれたちの炭鉱

厳しい生活と闘争の中で、なお誇りを失わない炭田地帯の人々。「最後には、政府は軍隊も動かすかも知れないな」「なにがあってもおれたちは生き延びる。炭鉱国有化以前の奴隷や家畜のような状態にもどるわけにはいかない」と決意を固めています。

ヒックルトン炭坑の一労働者は「この辺の連中は、四百万人の失業者の中に蹴りこまれるつもりはないよ。おれたちがやっていることは国のためなんだということを政府が認めるまでがんばる。仮に炭坑が閉鎖されるとすれば、それはサッチャーではなく、おれたちが決めることだ」と語りました。

〔連合〕

× ×

イギリスの炭鉱労働者が、サッチャー政府の炭鉱閉鎖政策に反対してストライキを開始したのは昨年の三月十二日。ストは、いっせいストではなく次第に波及・拡大したのですが、この拡大を防ぐため激しい弾圧や、分裂攻撃がいまも執ように続いています。

三池炭鉱の歴史の中から

くろダイヤホリ――外財

その四 第二回

十五分会 武松輝男

日本民俗文化大系『山民と海人=非平地民の生活と伝承』(小学館刊)を読んでいると、いまから三百七十年前の天和元年の頃は、鉱夫のことを「外財=ゲザイ」と呼んでいた、と記されている。

外財というのは、人間の身体の外で得られる財物のことで、銀山でいえば「カネ」、金山では「コガネ」というものである。石炭はかなり遅れて商業的に掘られはじめるが、さしずめ「くろダイヤ」とでもいえるものであろう。

この外財に相対する言葉に「内財=ナイザイ」というのがある。これは、人間の身体の内につくられる財のことで、神仏などへの信仰から培われた豊かな感情や情緒だといわれている。

さて、三百七十年前の頃の三池炭鉱では、近郊の住民たちが自家用の焚料炭として自由に採掘していたぐらいで、専業の坑夫を雇って間部(マブ・前掲書では坑道のことを記しているが、三池では浅い竪坑のことを指している)をつくり、石炭を本格的に掘りはじめたのは、およそ百十年あとの享保六年からである。

このような石炭の採掘の専業化を、一般的に商業経営炭鉱といっている。それは、まとまった石炭の炭量を掘り出すためには、かなりの設備と人員が必要で、それらの資金調達や人員募集に大きな力をもつ、藩や大資本家などが経営に乗り出してきたからである。

このようになってくると、人間社会の財を掘り出していた「カネホリ、くろダイヤホリ」も社会の財そのもののためではなくて、藩や大資本家が欲しがっている、石炭から生み出される〝利潤〟のために働くという、いわゆる賃雇用労働者に変質していくのである。

『三池争議』(三井鉱山編)で専業坑夫の多くが「人身売買のような形で雇われていた」と、そのへんの事情を記しているのも、賃銭の低い労働者を雇って、より多くの利潤を得ようとしている藩や大資本家の意向をよく伝えているといえるだろう。

しかし、いかに資本家に雇われている労働者だといっても、人間社会の「タカラ」を掘り出していることは間違いないことで、そういう意味合いでは古代も現代も同じことではないか。

山本作兵衛さんの炭坑絵物語りや、数多くの炭坑の唄の中で、炭鉱労働者のことを下罪人などと卑下しているのをよくみるが、それは、かつて炭坑があったのは山地で、そこはマタギが崇敬した山岳宗教の聖地と同じことで、平地民は勝手に入り込めないところであった。だから、生活上のトラブルで他人からの迫害にいたたまれずに逃げこむ「伏匿所」の役割りも果たしていたのである。つまり、伏匿人とは、罪を犯した者も多少はいたが、炭坑絵物語りや炭坑の唄でいう下罪人とは、本質的にその意味は違っていたのである。

だからこそ、これらの人々を安い賃金で働かせることは。本来の意味合いを失墜させている。

「外財」は、社会に活力をつけるものである。だからこそ、石炭という社会の財を掘る「くろダイヤホリ」が坑内のことを地獄の一丁目などといわないで安心して働ける設備にすることが肝要で、三川鉱や有明鉱のように、保安の設備をおろそかにして災害をひき起こし、多くの労働者を殺傷することは、もってのほか、といえるだろう。

(カットも筆者)

三池闘争から25年

原稿募集

情熱を燃やし、激しくたたかわれた『三池闘争』からすでに半世紀、二十五周年を迎えました。

国際石油資本の日本へのなぐり込みを契機に、石炭産業は構造的危機に直面し〝エネルギー革命〟の名によるスクラップ・アンド・ビルド政策の強行という背景のもとで、資本は人員整理を中心とする全面的合理化を開始し、三池は全国の労働者の支援を得て労働運動史上に特筆されるたたかいに立ち上り、日米安保条約に反対するたたかいとも結んで、果敢にたたかったものついに勝利することはできませんでした。

その後の三池と炭鉱労働者は、苦難の道程を歩むことになりましたが、社会情勢も労働運動も大きく変貌をとげています。

三池で燃やしたたたかいの焔はなんだったのでしょうか。そしてそれぞれの生きざまは…。

この機会に二十五年目に語る経験と教訓を今日的な視点でとらえかえすために、みなさんのご投稿を募ります。

▼…形式、内容はとくに定めませんが、千二百字以内。

▼…本紙の読者であればどなたでも投稿できます。また、三池闘争にかかわった多くの皆さんからの投稿をお待ちします。

豆知識

大型間接税とは

物品税は、現在個別の商品やサービスにかけられていますが、今回いわれている大型間接税は、原則として全ての商品、サービスに課税するというものです。政府は、一九八七年度からの導入に向け検討を進めていますが、もし、導入されますと数パーセントの税率で数兆円の増税になるものと見られています。

大型間接税は、所得に関係なく商品を買ったり、サービスを受けるたびに税金が掛けられますから、低所得者ほど重くのしかかる税金です。さらにこの大型間接税導入で、企業が税金を商品に転嫁するために物価の高騰や便乗値上げなど大きな問題を含んでいます。

× ×

ちなみに〝目に見えない税金〟間接税を一世帯平均一カ月一万六千円余を払っているという調査報告があります。

フナ35キロ、4.5キロのコイも

味わった釣りの醍醐味

9分会 古賀和男

二月三日、八代郡竜北町の干拓地内の池へ釣友と出かけた。

まだ夜も明けやらぬ早朝の六時半。埋め残しのこの池は対岸まで二百メートルはあろうか。ほぼ四角形で、中央部に十メートル四方の鯉の生け簀が点々と四つほど浮んでいる。その生け簀の近くで釣るのである。

ボートを漕ぎ出し、東側の生け簀のそばで北風を背に東向きに釣り座をかまえる。

そんなとき大粒の通り雨が二度ほどあり、あわてて雨具を着る。また、突風が起こり、アンカーを引きずってボートが流されたりするアクシデントがあったが、気を取り直してボートを元の位置にセット仕直して釣りはじめると、天気も晴れ、風も止み、九時ごろには格好の釣り日和りになった。

表水温は六度C。厳冬の池の水温にしては暖かいのか、魚はおどろくほど活性があり、強引にしぼり込むので、深ダナから引き抜くさまは尺以上になるとまさに快感である。竿は満月のようにまがり、あっちこっちに走られ、腕が痛くなるほど魚との引っ張りあいの連続で、入れ食いが昼ごろまで続いた。尺以上がダブルで釣れてくることも十回ほどあった。

十一時ごろ、四・五キロの大鯉を釣りあげた。パンパンに抱卵していて身動きできないのか重いだけで素直にあがってきた。

強い西風が吹き、大波が立ってきて釣れなくなった。昼ごろまでに二人で三十五キロほどのまたとない好漁だった。三十五センチ止まりの型だったが、半分は尺以上で、釣りの醍醐味を腹いっぱい味わった感じの釣行だった。

少し減水している。水深は三・五メートルくらい。冬は底を釣るのが常道で、竿を四・五メートルにする。道糸は三号。針十号のスレ二本鉤。針素二号の鮒釣りにしては大仕掛けである。

タナを底にあわせてウキをセットする。練り餌を両鉤に、親指の先ほどの大きさにつけ釣りを開始したのが七時半である。

空あわせしながらポイントに餌を打ち続けていると、寄りはじめたのか魚信がはじまりポツリポツリと釣れだした。

(写真は大鯉を手に谷川さん)